ONOMICHI CITY MUSEUM OF ART

フィンセント・ファン・ゴッホ《はね橋》1888年

IMPRESSIONISM

Wallraf-Richartz-Museum—Foundation Corboud

尾道市立美術館リニューアル・オープン記念特別展 II

「ゴッホのはね橋がやってきた」

印象派のあゆみ展

2003年2月22日(土)—4月13日(日)

開館時間＝午前9時—午後5時
(入館は午後4時30分まで)
休館日＝月曜日
観覧料＝大人1,000円、大・高生800円、中・小学生500円
[前売りは200円引／団体(20名以上)は100円引]

主催＝尾道市立美術館／中国新聞備後本社　後援＝ドイツ連邦共和国大使館・総領事館／広島県教育委員会／NHK広島放送局
協力＝Lufthansa／Lufthansa Cargo　特別協力＝JR西日本　企画協力＝ホワイトインターナショナル

ポール・セザンヌ
《エクス=アン=プロヴァンス西部の風景(ベルヴュ平原)》
1885/87年

尾道市立美術館

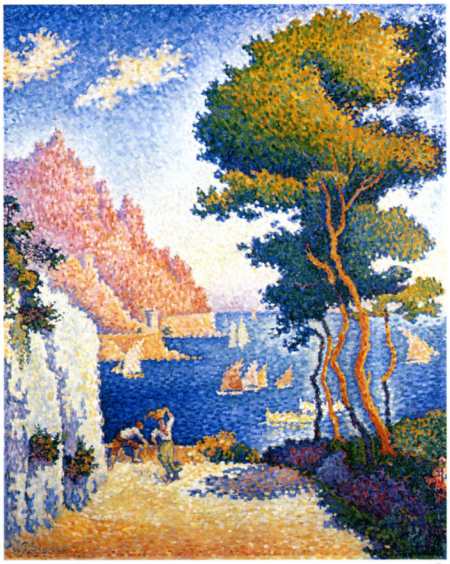
IMPRESSIONISM
Wallraf-Richartz-Museum—Foundation Corboud

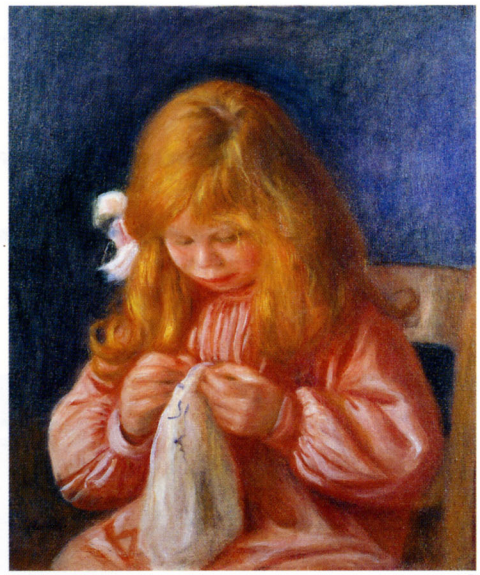
ゴッホは、35歳になる1888年の2月から、早すぎる死の前年の1889年の5月まで、1年と3ヵ月の間、パリを離れ、南フランスのアルルに滞在しました。もっと明るい空のもとで、もっと強い太陽の光の中で制作したい、というのが彼の希望でした。それからまもなく、つぎつぎに描かれた7点の《はね橋》の絵画の、その最後を飾ったのが、この作品です。わたしたちにはもう見慣れたものとなったゴッホの、炎のようにうねる筆致や、力強く輝く色彩は、いまだちらちらと、水と空に映える〈はね橋〉の静かなたたずまいや、川岸にもえ出でた黄色い茂みや緑の木立の中から、顔をのぞかせているだけで、まさにいま、生まれ出ようとしています。浮世絵を愛し、日本人のくっきりとしたイメージにあこがれ続けたゴッホが、まばゆいばかりの色彩の輝きを、ここアルルの空の下で、カンヴァスへ解き放とうとし始めたのは、ちょうどこの頃のことでした。

ゴッホとひととき制作をともにしたゴーギャンの、日々の労働を見つめた画面にあふれる柔らかな色彩の輝き、そして、目に見える自然と、意識下で認識される自然を、画面に再現しようとしたセザンヌや、日常の光景を温かくとらえたピサロやシスレーの作品など、フランス印象派の名だたる巨匠たちが初々しく花開こうとしている頃の珠玉の名品が、知られざるドイツ印象派の名手たちの逸品とともに、ここに集います。7年ぶりの来日となった《はね橋》と、しまなみ海道を結ぶ10の橋の始まりである、ここ〈尾道〉で出会うことで、あなたの知らない、日本の文化を愛した生真面目なゴッホが、あふれる色彩をいまだ胸に深く秘めながら、大いなる歩みをしるし始めたばかりの印象派の、豊かなイメージの世界への〈かけ橋〉となって、あなたをいざなってくれることでしょう。

❶

❸


❻


❷

❹

❼

❺

❶カミーユ・ピサロ《ポントワーズの果樹園、日没》1878年
❷オーギュスト・ルノワール《縫い物をしているジャン・ルノワール》1898年
❸ポール・セザンヌ《洋梨のある静物》1895/1900年
❹ポール・ゴーギャン《麦を集める》1884年
❺クロード・モネ《アニエールのセーヌ河》1873年
❻ポール・シニャック《カボ・ディ・ノリ》1898年
❼アルフレッド・シスレー《ルーヴシエンヌの周辺》1876年

○特別記念講演会(予定)

「ゴッホの《はね橋》とヴァルラフ=リヒャルツ美術館について」

会場:尾道市立美術館　日時:2月22日(土)14:00〜

講師:ライナー・ブデ氏(ヴァルラフ=リヒャルツ美術館館長)

＊当日の入館者を対象とします。申込みは不要です。

○次回展覧会予告

「尾道絵のまち四季展—第10回記念特別大回顧展」

2003年4月18日(金)〜4月29日(火・祝)＊会期中無休

ご利用案内

- JR西日本山陽本線「尾道駅」から東行きバスで「長江口」下車、ロープウェイで「千光寺公園」へ(バス直行便は便数が少ないのでご注意ください)。
- 自家用車の場合、千光寺山ドライブウェイ経由でかおり橋駐車場へ(ご利用者は200円割引いたします)。
- 尾道駅および新尾道駅からタクシーで1,200円程度です。

尾道市立美術館
ONOMICHI CITY MUSEUM OF ART

〒722-0032 尾道市西土堂町17-19千光寺公園内 Tel.0848-23-2281 Fax.0848-20-1682